

近畿水の塾設立記念会及び『柳川堀割物語』ミニ上映会の報告

<近畿水の塾設立記念会>

日時：2003年2月11日（火）

場所：大阪府青少年会館第6会議室

参加人数：記念会 65名、交流会 45名

プログラム内容：

- 13:00～13:30 「柳川堀割物語」と「広松 伝」を語る 語り手山道 省三氏（全国水環境交流会事務局長）
- 13:30～16:20 映画「柳川堀割物語」
- 16:30～17:00 近畿水の塾がめざすもの
- 18:00～ 交流会

近畿水の塾設立記念会は、小雨降る森ノ宮の大阪市立青少年会館で、65名の参加により、盛大に行なわれました。

まず、広松さんの一番弟子を自認される山道アトリエの山道省三さんから、広松さん語録として、「～ですねえ」、「なあんもわかっくらんですよ」といった独特の語り口をまねて、水とのつきあい方や釣りに行ったときの話など、広松さんの思い出を紹介してくださいました。飲み屋で「もてた」話なども広松さんの日常を垣間見るお話でした。「少し違うと言われるけど、あえて語り口をまねしてしゃべってみたい」という山道さんの自己紹介のとおり、広松さんを知っている人は、「そのとおりだなあ」という感想だったのではないのでしょうか（ちょっと似ていて、ちょっと違うということです）。

私も広松さんの話はけっこう深刻な面も多かったという思い出があります。でも淡々と話す語り口はわかり易く、人を引きこむものでした。パートナーシップという言葉がでてくる数10年も前にそれを実践していたのです。



（山道さん）



（映画の一部）

続いて柳川堀割物語の上映です。休憩をはさんで165分(2時間45分)の中身はいかがだったでしょうか。堀割の複雑な構造と、堀割にまつわる人々の暮らしを淡々と、しかし、しっかりと映像に残していました。お祭りの映像もまるで回想シーンを見ているようでした。堀割を埋めることに反対して、わずらわしい水とのつきあいを選択した柳川市の人々の、まさに先頭にたっていた広松さんの活動はやはり感動的でした。



（会場の風景）

自然の営みを上手に人が利用することで、環境や防災に配慮した暮らしが可能になるのです。古くから受け継がれてきた伝統的な堀割とのつきあい方は、広松さんに言わせれば「正しい科学技術」なのです。それはおそらく21世紀に必要な持続可能な技術なのだと思います。21世紀の選択すべき代替技術は、過去に実践されているのです。

少々飛躍的ですが、「日本はエネルギーが不足している」と言うのは、うそなのではないかと思えて

きます。江戸時代まで 3000 万人の人をこの小さな島で養うことができたのは、日本中が水郷であり、里山に恵まれてきたからではないでしょうか。この技術を思い起こして、及ばずながら少しでも実践していくことが私たちに求められている気がします。雨の中ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。土谷さんドイツからのたより、ありがとうございました。(報告：久保田洋一)



(交流会 カップ様を取り囲んで)

< 『柳川堀割物語』 ミニ上映会 >

日時：2003年3月10日(月)

場所：河川情報センター6階会議室

参加人数：13名

プログラム内容：

18:30～18:45 福廣さんから堀割物語と広松さん紹介

18:45～21:35 映画「柳川堀割物語」

21:00～ 交流会

設立記念会に参加できなかった何人かの方からの要望があって、再度、「柳川堀割物語」の上映会を行うことになりました。



(呼びかけ人の永井さん)

都市基盤整備公団の永井さんの呼びかけにより、平日の晩ながら、13名の方が集まり、仕事疲れもものともせず、165分間の長編を真剣にみんなで鑑賞

しました。中には神戸や堺から、はるばるやって来ていただいた方もありました。

上映会終了後の交流会では、明日の仕事を控えているにもかかわらず、映画や広松さん談義に更に盛り上がりました。(報告：足立崇博)



(ミニ上映会の風景)

< 参加者の感想 >

(藤木さん)

平松伝さんの勇気ある行動に感激しました。自分達の歴史、文化、川を守ろうと口で言うのは簡単ですが、自ら先頭に立ち行動して、文化と川を再生していく姿をみて、本当に感動しました。一人の人間にできることはわずかかもしれませんが、行動が感動を生めばたくさん人間が変わっていく。まずは油や洗剤を極力流さないという小さなことから変えて行こうと思いました。

(永井さん)

3時間のドキュメンタリー映画。正直なところ、初めはちょっとつらいかなとも思ったんですが、最後まで楽しませていただきました中身の濃い、良い映画ですね。あまり難しいことは考えずに見ていたのですが、様々な場面で感動し、感心させられました。

わずらわしい付き合いの大切さや「もたせ」に代表されるような知恵、協働や祭りなど、いろんな考えるきっかけを貰った気がします。といっても、なかなかその思考が続かないのが、悲しいところなのですが。

また、映像がほんとうに綺麗で豊かですね。身近に川を感じる事が無くなって久しいですが、この映画を見ていると、なんだか、懐かしい気持ちでいっぱいでした。

今回初めてこの映画を見たのですが、流されるままに見ていた気もします。多分、あらためて気づくことがまだまだいっぱいあるんでしょうね。2回、3回と見てみたい映画だと思います。良い機会を下さ

って、本当にありがとうございました。

(百済さん)

柳川の城下町には「水の一滴は血の一滴」という意識が古来からあり、水と人の大切なかかわりについて一人一人が生活を通じて実感していた。そうした町に近代化の波が寄せ水とのかかわりをわずらわしいものと思うようになりつつあったところに、一人の市職員が立ち上がった。広松伝さんがもし行動を起こさなかったら柳川の水郷はおろか生活に深く根付き培われてきた文化、観光資源、安全など計り知れない市の財産が失われていただろうと今の柳川市民は思っていると思います。

市長の英断もよくぞと言った感じで、水郷の町再生の立役者ですよね。感動いたしました。映画自体の出来も、さすがジブリのコンビが作っただけのことはあるな—と思います。

感動だけではなく自分が仕事の中でこの事例をどう生かすのかという部分ですが、今朝もこの映画を知る2名の方と話をしたのですが、堺で抱えるいろんな問題は何かしないとけないんですが、どうしていいかわからないでみんな悩んでいるのが現状です。

課題解決のヒントを求めて、これからも様々な機会を利用し、様々な人と出会い、自己啓発に励まないとけないと自覚いたしました。

(木下さん)

堀割を流れるきれいな水を汲むために冬の寒い日でも朝早くに一度起きて、また寝る。今は、どんどん便利になってきて、寒い、つらい、苦しい、また逆に楽しいとかいうことを感じる機会がなくなっている。

川とのわずらわしいつきあいをいつまでも続けていくことが大事、と広松さんは言っている。年に一回、水を抜きヘドロを田に上げ、魚を取る。これをみんなでやることは、個人の考えを尊重する(各々が好き勝手にやっている)という今の世の中では、やっぱり大変だ。でも、これが地域のつながり、連帯感を生み出していることは間違いない。

川の維持管理。汚水の流入を減らすという努力が必要。市民を巻き込まないと、行政が底泥を浚渫してもまた溜まってくる。非常に当たり前のことではあるが、日本で市民を巻き込んでやっているところはどれだけあるのだろうか。

(足立)

“やる”か“やらない”か。“やる”は“やらない”と無限大に異なります。柳川はやったからすごい。そのきっかけをつくった広松さんは、本当にすごい。私たちは、“やる”か“やらない”かの簡単な選択

において、実は意外と些細なしがらみや障害のせいで、ついつい“やらない”という方にかたむいてしまうことがあります。

しかし、失ってしまってからでは遅い。それは、どんな科学技術を持ってしても、どんなにお金をつぎ込んでしても、なかなか取り戻せないことが多々あります。そのことを、よく知っておくことが大切だと思います。「柳川堀割物語」は、そんな私たちに教訓を与え、勇気づけてくれるものでありました。

それ以外に、私自身、この映画を何回も観る中で、強く感じたことがあります。それは、やはり、私たちと川(自然)との本当のかかわりを取り戻すためには、日常生活の中で恩恵と畏敬の相反する二つの事象を、体験又は感じる瞬間(川との接点)を持ちつづけることが大切だということです。

恩恵の瞬間とは?一番は、恵みを食として享受する瞬間だと思います。それでは、畏敬の瞬間とは?おそらく、非情なまでも私たちの命に襲いかかってくる瞬間、そこまでいなくても、自分が自然に対して心からちっぽけさを感じる瞬間だと思います。

この2点を感じる事ができる社会を取り戻すことができれば、私たちの心ももっと豊かになるような気がします。

少し前の日本には、そんな社会が、きっと当たり前にあったのだと思います。それは、本当に少し前のことで、かろうじて覚えている私たちは、完全に忘れてしまう前に、なんとかする必要があるかと思っています。

以上のようなことを感じる事ができた映画でした。165分の映画、全部で4回観ましたが、何回観ても、やっぱり長かった。